

## 理学系研究科・理学部教職員と留学生・外国人研究員との懇談会開かれる

去る1月26日(月)午後6時から山上会館地階食堂において、理学系研究科・理学部の教職員と留学生・外国人研究員との懇談会が開催された。

参加者は留学生・客員研究員、教職員を含め計94名。会は壽榮松理学系研究科長・理学部長の英語での挨拶に始まり、小間評議員による乾杯の音頭の後、料理や飲み物を手に歓談が始められ、会場は和やかな雰囲気包まれた。

司会は国際交流室の都河講師。会半ばに、川口留学生センター長、マーフィー重松助教授および酒井留学生課長より挨拶があり、続いて留学生5人のスピーチが行われた。物理学専攻の研究生金銀淑さん(韓国、女性)とゴチェ・ミッシェルさん(カナダ、男性)は来日してからの体験やこれからの研究の抱負について流暢な日本語で話し、情報科学専攻の修士1年朱木蘭さん(中国、女性)は四季の移り変わり等の日本の良さに加え、日本文化

及び日本人について率直な考えを述べた。鉱物学専攻の博士3年ネスポロ・マッシモさん(イタリア、男性)は現代科学の動向が応用科学に向いているが、基礎科学の知識は大切で、機械より自分の理性を利用する「理学」という元の意味に立ち返ることの重要性について熱心に語った。最後に、情報科学専攻の研究生アベラ・マーク・アントニーさん(カナダ、男性)は日本に留学することになった経緯について話した後、ギターで「禁じられた遊び」を弾き、その美しい音色は参加者に感動を与えた。

理学系研究科国際交流委員会委員であり、地球惑星物理学専攻のゲラー助教授による閉会の辞があり、全員で記念写真を撮影後、午後8時に盛況のうちに閉会した。毎日研究や実験に忙しく研究室間の交流も難しい留学生たちは、所属する研究室以外のいろいろな人とパーティーで出会い、楽しいひとときを過ごすことができた。



壽榮松理学部長と話す留学生ジャヤセカラ・パリタさん  
(生物科学・スリランカ)



なごやかに歓談する留学生たち



小間評議員と歓談する留学生アベラ・マーク・アントニーさん  
(情報科学・カナダ)

## 理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉

1997年11月17日、12月15日および1998年1月26日に壽榮松研究科長、小林事務長と理学部職員組合（理職）との間で定例研究科長交渉が行なわれた。主な内容は以下の通りである。

### 1. 事務一元化と組織化問題について

11月の交渉で理職は、理学部の組織化案は事務一元化を含めた事務機構改革とどのような関連になるのか、と質問した。事務長は、11/12の人事課ヒアリングで理学部としては従来の組織化案を要望したと述べた。また、本部の事務一元化案がハッキリしないために対応が鈍いが、理学部としては従来の組織化案で押していく、と回答した。理職は、組織化の遅れに絡んで待遇改善が遅れることの無いよう、また待遇改善の見通しのない状態であらう年度4月1日に組織化を実施しないよう主張した。

図書職員の組織化について科長は、図書委員会には理学部の図書室の将来について一般的に議論してもらった、事務一元化の流れで組織化が白紙に戻ったわけではないが、事務と同時の組織化は難しいとの見通しを述べた。

事務一元化については12月・1月の事務長会議で骨子が出されており、理職は1月の交渉でその内容について質問した。科長は、事務一元化の主旨は行財政改革の一環であることと東大での定員削減上乘せ分（17人）への対応であり、今の案では全体として10合同事務局に部局事務を統合し、事務の合理化をはかるものだとして回答した。また、理学部規模では合理化になるのか疑問であり、現場の声を聞いて欲しいと言っている、とも述べた。理職は、重要な事項なので専攻長を通じて教室まで事務一元化案の資料を回し、職員からも意見を聞くべきだと要請した。（後日、専攻長会議と事務連絡会議で案が配布された）

理学部教室事務の組織化との関連で理職は、流動的な局面なので組織化案は白紙に戻して欲しいと要請したが、科長は、本部案と理学部の組織化はぶつかるところはないので進める、と回答した。理職は教室事務の組織化に当たっては専門職員を付けるよう要求し、京都大学の専門職員の規定も資料として渡して訴えた。

今回の事務一元化案に図書が入っていないことについて、科長は、今回は事務中心であると答えた。また、理学部の図書もある種の統合化を考えざるをえないが5掛編成が難しい状況であり、事務系とは切り離して独自に編成するなど、図書委員会に検討をお願いしたい、と述べた。理職は、図書の組織化についてはあくまで待遇改善を主に考えて欲しいと要望した。図書の専門職について事務長は、全体レベルとして要求していると述べた。

### 2. 技術職員問題について

国大協総会が11/12-13に開かれ、技術職員への「職

導入が了承され、文部省訓令33号として各大学での具体化が年明けから始まった。98年4月からの訓令実施に先立ち、理職は12月の交渉で選考基準の改善などを含む要望書を手渡した。またこの問題に関し、技術委員会と技術部からなる専門委員会の設置を要求した。

1月の交渉では4月1日から実施、1月中旬に選考基準を決め、2月6日には文部省への締切というスケジュールが報告された。選考基準について科長は、主文にウエイトがあり、8項目に引きずられずに業績に応じて読み替えをすべきである、と発言した。さらに、現在6級の人は全員技術専門官へ行くが、今後については不明である、と述べた。

また理職は技術部の運営について、現行のピラミッド型と専門職の組織形態は合わないので、現在の体制を改めるよう要求した。

### 3. 昇級・昇格問題について

#### 事務職員

10月の交渉で科長が「教室事務に専門職はなじまない」と発言したことに対し、11月の交渉で理職は、東大から文部省への給与改善要求でも大学事務職員もある意味では専門職であると記述されていること等をあげ、専門職適用に努力して欲しいと要望した。（関係資料を手交）

理職が11月の本部ヒアリングの中身について聞いたところ、事務長は、勤務年数や異動希望を考慮して昇任要求を出していると答えた。科長も専門職員は組織の合理化を伴わないと難しいと発言をした。これに関し理職は、局長交渉では上申に制限は付けておらず、むしろ知りたい、と言われた件を伝え、理学部側の上申への姿勢を批判し、もっと積極的な待遇改善の努力を強く訴えた。特に4級高位号俸者の不利益を例に引き、異動希望などの条件を付けず、まず上申することを要求した。科長は個別の待遇改善には努力すると答えた。

また理職は、11月には行（二）から行（一）へ振替わった掛員の掛主任昇任、1月には定年まで2年となった事務主任の6級を確実に実現するよう訴えた。

#### 図書職員

1月の交渉で理職は、来年度の部局推薦に向けて要望書を提出し、特に、条件を満たしているにもかかわらず今年度5級昇格しなかった人の来年度の実現を強く訴えた。この際事務長は、推薦は機械的ではなく、場合によっては勤務態度も勘案する可能性を示唆したため、理職は50才で5級は低い水準であり、該当者は全員昇格させるべきと強く主張した。

#### 技術職員

理職が11月の交渉で7級昇格について聞いたところ、事務長は、各専攻長に推薦調書を依頼し、それを付けて

該当者全員上申したと回答した。1月の交渉で理職は、昇格要望書を提出した。6級昇格の配分について事務長は、まだ理学部に来ていないと回答した。(後日、理学部には2名の配分があった)

#### 4. 柏問題について

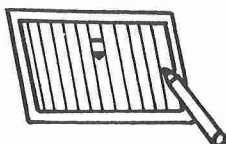
本郷で立ち上げることになった新研究科の事務機構について、科長は11月の交渉で、まだ本部事務局で検討中であるが、理・工が主体で人員も出さざるを得ない、と答えた。また、理学部とは別組織なので、専攻事務室に新研究科の事務を依頼することは無いと述べた。さらに、新研究科への任期制の導入や運営機構なども、まだ聞いていないと述べた。図書については当分、理学部と併用

になるだろうと述べた。

#### 5. その他

理職書記局・理学部休養室・技術部の引越しについて理職が質問したのに対し、科長は、新研究科と理学部との間で割り振りが決まらず、検討中だと答えた。理職は11月の交渉後に引越に際しての要望書を提出し、特に引越先については後回しにならないよう、交渉では重ねて要求した。

またネットワークのアドレス取得に関して科長は、要はセキュリティの問題で、adm.(事務)を使うのは困るが、独自のサーバーを持つことは構わない、と回答した。



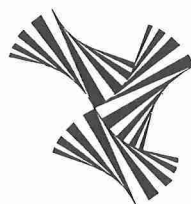
# 人事異動報告

## (講師以上)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
化 学	助教授	岩 田 耕 一	9.11.16	採 用	
〃	〃	大 西 洋	9.12.16	昇 任	講師より
鉱 物	教 授	バンフィールド・ジリアンF.	10. 1. 1	〃	助教授より
地 惑	講 師	鍵 裕 之	〃	転 任	筑波大学講師より
化 学	助教授	佐々木 岳 彦	10. 2.16	昇 任	助手より
〃	講 師	菱 川 明 栄	〃	〃	〃
地 惑	教 授	杉 浦 直 治	10. 3. 1	〃	助教授より
化 学	講 師	近 藤 寛	10. 3.16	転 任	工業技術院より

## (助 手)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
情 報	助 手	河 野 健 二	9.11. 1	採 用	
〃	〃	高 田 広 章	9.12.16	昇 任	豊橋技科大学講師へ
化 学	〃	市 田 光	10. 1.16	休職更新	7.7.16～10.7.15
地 惑	〃	金 嶋 聰	10. 2. 1	昇 任	東工大助教授へ
物 理	〃	白 水 徹 也	10. 3. 1	休 職	10.3.1～11.2.28
〃	〃	山 田 章 一	〃	休職更新	7.8.27～10.3.31
〃	〃	江 尻 晶	10. 3.16	転 任	核融合科学研究所より



## 博士（理学）学位授与者

平成9年11月17日付学位授与者（3名）

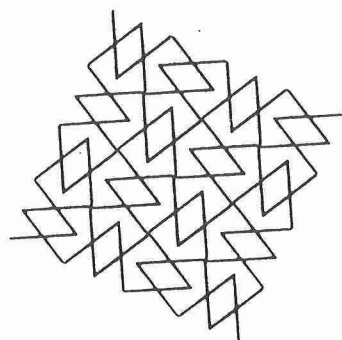
種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	物 理 学	上 坂 友 洋	${}^3\text{He}(\vec{d}, p){}^4\text{He}$ 反応の偏極相関係数測定
論文博士	〃	浜 口 智 志	プラズマ中の荷電微小粒子系
〃	地球惑星 物 理 学	青 梨 和 正	リモートセンシングデータをメソスケール数値予報モデルに導入する物理的初期値化の研究

平成9年12月15日付学位授与者（1名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	物 理 学	パスコフ・ロディヴィノ・デレノン	t-J モデルの g-on 平均場理論

平成10年1月19日付学位授与者（2名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	物 理 学	北 澤 雅 志	ジェット内のハドロンの角度分布
論文博士	化 学	劉 世 林	真空紫外レーザーによる簡単な分子の回転前期解離ダイナミクス



## 編集後記

広報委員として、理学系研究科・理学部の広報に目を通していると、われわれが席を置くこの研究科・学部がとても身近で親密なものに感じます。大学での生活は、ともすると、諸々の忙しさのあまり、限られた自由な時間を自分の部署での研究や教育に集中して、他が見えなくなりがちですが、実際には、身の回りに実に多くの興味深い研究や活動、人物がいることが分かります。このように感じるようになったのも、委員長として広報の1頁毎に目を通すようになってからで、当初はやっかいなことだと思っていました。しかし、新任の先生方のご挨拶には、ご期待の通り将来進展・発展されることを祈る気持ちとなり、個々の研究ニュースには、その研究が第一級であるという意気込みが感じられ、また、理学の中にこうも様々な面白い研究があるものだ感嘆しました。

留学生諸君の記事には、苦労話、お国自慢、日本人への印象など、日本人自身には思いも寄らぬ事も多々あり興味深く、また、それを表現する日本語のすばらしさに驚きます。退官に際した先生方からの記事には、永年過ごされた理学系研究科・理学部への熱い想いと残る者への期待が込められています。OBの方々、在職・在籍される方々もどうぞ広報委員になったつもりで、広報を見てみて下さい。

本年度も無事編集を終え、来年度に向けて引き継ぐ事が出来るもの、忙しい中に広報のために寄稿して下さいました多くの方々に依るものです。また、編集の実務のほとんどは庶務の方々のご尽力に依り、特に原さんにはお世話になりました。編集委員一同深く感謝します。

堀 内 弘 之 (鉱物学専攻)  
horiuchi@min.s.u-tokyo.ac.jp